

## 仏様のおはなし新シリーズ第82集 「「やられたらやり返す」って、どうぞじょう?」

お寺は、しばしば泥棒に狙われ、私のお寺も何度も被害にあつたことがあります。

壊されたものの損害や盗られた金額の大小に関わらず、代々護つてきたお寺を傷つけられ、ご門徒の皆さんが持つてござられたご懇念を奪われた事には怒り心頭であります。どうすればいいか、どうしてやろうかとあれこれ考え、果ては「足が千切れるくらいの虎ばさみでも仕掛けでやろうか」とか考えています。

「やられたらやり返す」「やられる前に手を打つ」平穏な生活を営む上で皆が考へることです。「攻撃は最大の防御」などという言葉もあります。

これは個人だけの話ではなく、昨今の難しい国際情勢の中、國もそんな事を言つています。防衛、反撃、圧力、それも平和への一つの考え方でしよう。

しかしこれって、はたしてどうでしよう?

今から約800年前、親鸞聖人は流罪により京都を離れ越後へ、その後赦免され関東へ赴き今の茨木県の稻田に庵を結ばれました。そこで人々にお念佛の教えをひろめていかれました。

親鸞聖人のところへは、身分の隔てなく多くの人々が集まり、お念佛をよろこぶようになつていきました。これを快く思わなかつたのが弁円という山伏です。お念佛がひろまるにつれ、それまで自分のところに来た信者が減つてくる事に腹を立て、しだいに親鸞憎しの思いが募つていきました。

弁円は聖人を亡き者にしようと、聖人がいつも行き来する道で待ち伏せをしたり、呪いの祈祷をしたりしましたが、うまくいきません。

ついに業を煮やし、直接稻田の草庵に弓矢や刀を持つて乗り込んできました。

殺氣を放つ弁円に、聖人は恐れるそぶりも見せず、穏やかな口調と優しい表情で、自分をわざわざ訪ねて來た客人として暖かく迎えられました。

その聖人の様子に、思わず殺氣を削がれてしまつた弁円は自分の心の内を話し出しました。聖人は弁円の言い分を聞き、ご自分もお念佛の教えを語られました。その話に心打たれた弁円は、弓矢を折り、刀を捨て、親鸞聖人のお弟子となりました。

名も明法房とあらため、その後の人生を念佛者として歩みました。阿弥陀如来のお救いをよろこび、寺を建立しあ念佛をひろめながら、これより30年ほど後、親鸞聖人より先に亡くなりました。

明法房の往生の知らせを聞いた聖人は、自分を殺しに來たあの弁円が、お念佛のよろこびの中で生き抜き、お淨土へ生まれたことを想い、「かへすがへすうれしく候ふ」とおつしやつたと伝えられています。

もしあの日、襲つて來た弁円に対して親鸞聖人も武器を持つて立ち向かついたら、少なくともこのような未来はなかつたことでしょう。

『無財の七施』というものがあります。いわゆるお布施ですが、お金や物など財産を施す財施の他に人や世のためになる事があります。

それは、優しい眼和やかな顔で接し、相手の心を思い愛情のある言葉をかけ、相手の居場所を大切にする。その為にこの身を惜しまないということです。

これが本当に誰もが認め合い、尊重し合い、安心して生きる道ではないでしょうか。

